

会員紹介：前川美湖（まえかわみこ）さん

私の略歴



1972年（昭和47年）、アメリカ・ミネソタ州生まれ。1996年3月、上智大学文学部卒業後、財団法人 貿易保険機構 査定回収部に勤務。3年後の1999年12月にイースト・アングリア大学大学院「環境と開発」修士課程を修了。2000年7月に国連開発計画（UNDP）のJPOに採用されて、中国事務所、環境・エネルギー部にプログラム・オフィサーとして勤務。2003年にリードプログラムに採用されて、UNDP本部管理局、企画官として転任。その後2005年にはUNDPルワンダ事務所 環境・エネルギー部長、常駐代表補佐を歴任した後退職し、東京大学 大学院新領域創成科学研究科、国際協力学専攻博士課程に入学し、2011年9月に修了。2012年4月より東京大学 総括プロジェクト機構「水の知」（サントリー）総括寄付講座特任助教。2013年4月に大阪大学 大学院人間科学研究科 グローバル人間学専攻特任講師に転職し、2014年5月に公益財団法人笹川平和財団、特別基金事業室室長として着任し、現在に至る。

海外生活の変遷

「万の湖を抱く州」（Land of ten thousand lakes）のニックネームでも親しまれているミネソタ州で生まれたこと、そして、将来、海外で生活してもすぐに名前を覚えてもらえるよう外国人でも発音しやすいように「美湖」（みこ）と名付けられました。両親の予測通り、私は、海外と深く関わる人生を今も歩んでいます。ミネソタ州で生まれた後は、3歳で日本に帰国し、横浜市の公立小学校に通いましたが、その後も、小学生3年生の時に父親の仕事の都合で、テキサス州で一年間、現地の小学校に通いました。高校生時には、AFS という交換留学プログラムに参加し、ニュージーランドで一年間のホームステイを経験しました。

特に、この留学体験は、いわば私の原点となり、その後の私の人生観や将来の目標設定に大きな影響を与えたと言えます。交換留学を経験する以前の私にとり、自身の世界地図に存在したのは、日本と私が幼少期に一年間を過ごしたアメリカのみでした。しかし、AFS という留学プログラムを通じて、同時期にニュージーランドに留学していたアジア、北米、中南米、ヨーロッパなど、様々な国からの高校生と交流し、友達を作ることによって、私の世界は一気に広がりました。一年間をともに過ごしたAFSの友人たちを通じて、世界の広さとその抱える問題の複雑さを垣間見た気がします。そして、「この仲間たちが将来、誰も飢えることなく、互いが争い合うようなことがない、そんな世界に住みたい」と心底思ったのです。そんな思いを胸に、大学に入学し、専攻の文学部の科目に加えて、国際政治学や開発経済学の授業も履修しながら、

大学3年生の時にサークルとしてのSRID学生部に出会いました。自分がSRID学生部のメンバーだった時には、将来は国際開発の仕事に就き、SRID正会員になるのが、夢でもあり目標でもありました。

従事した仕事の内容

財団法人 貿易保険機構・留学時代（1996年～1999年）

大学卒業後は、財団法人 貿易保険機構 という旧通商産業省の外郭団体で、貿易保険実務の仕事に就きました。貿易保険という制度を通じて、日本の企業と開発途上国を含む海外の企業との貿易や投資を促進するという仕事に関心を持ちました。査定回収部という部署で、保険業務に携わりながら、資源エネルギー庁からの委託調査で、アジア諸国のエネルギー需給に関する調査に参加することになり、中国のエネルギー需給に関する調査のリサーチ・アシスタントとして、初めて中国北京に出張する機会がありました。1997年当時でしたが、既に大気汚染がひどく、目を開けているのも辛いほどでした。さらに、隣国である中国という国をもっと理解したいという大いなる好奇心にかられました。この訪問に強い衝撃を受けた私は、その後、アジア地域で環境問題に取り組みたい、特に中国で仕事をしたいという希望を持つようになりました。貿易保険機構での2年間の勤務を経た後に、イギリスのイースト・アングリア大学大学院にて環境学の修士号を取得し、その間に、世界銀行 農村開発部でサマーインターンとしても勤務しました。大学院在籍中に、外務省のJPO試験を受験し、国連開発計画（UNDP）に派遣されることになりました。

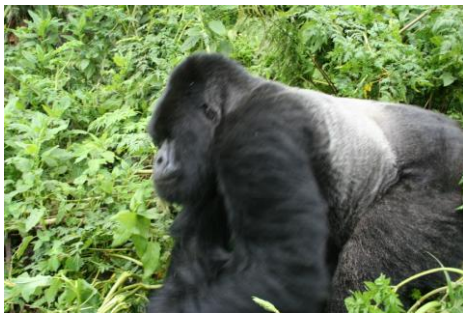
国連時代（2000年～2007年）

2000年から、国連開発計画（UNDP）中国事務所にてプログラム・オフィサー（JPO）として3年間勤務しました。その間、環境保全プロジェクトと援助協調の業務を担当しました。環境・エネルギー部に所属した最初の約2年間は、地球環境ファシリティー（GEF）拠出によるプロジェクトの立案、実施、モニタリング評価を担当し、特に、「再生可能エネルギー普及プロジェクト」は、現在の中国における再生可能エネルギー技術の普及と商業化、Renewable Portfolio Standard(RPS)制度（再生可能エネルギーの利用割合の基準）構築の土台作りに貢献したと考えています。最後の一年間は、中国で活動を展開している国連機関の調整や連絡を担うレジデント・コーディネーター事務所で、国連機関の調整業務に従事しました。UNDPやユニセフ、ユネスコなどの様々な国連機関全体の調整役であるレジデント・コーディネーターは、UNDP常駐代表が兼務していました。当時のレジデント・コーディネーターだったドイツ人の女性上司のもと、国連職員としての働き方について手ほどきを受けるまたとない機会となりました。

その後、LEADプログラムというUNDPの職員採用試験を受けて、運良く採用され、UNDP本部管理局（ニューヨーク）で、「企画官」として配属されました。UNDPの

職員満足度を測り、本部からなかなか把握しづらい UNDP のフィールド・オフィスの実態を調査するために実施していた「グローバル・スタッフ・サーベイ」や UNDP のカウンターパートを対象とした「顧客満足度調査」等の実施と企画運営を行い、その調査内容を分析し、UNDP 役員会に結果を報告し、提言等を行うのが主な業務内容でした。国連組織の本部、しかもいわゆる官房で勤務したことにより、組織をいかに運営するかという大局的な視点を養う貴重な経験となりました。

ニューヨークで二年間の勤務を経た後は、多くの UNDP 職員が感じるように、やはり開発途上国のフィールドに戻りたいという思いがつのり、次の赴任地として、アフリカを選びました。2005年から、UNDP ルワンダ事務所で、「常駐代表補佐」兼「環境・エネルギー部長」として勤務しました。UNDP ルワンダ事務所では、環境・エネルギー部の統括、財務、人材管理を行い、GEF 拠出のプロジェクトを含む、環境管理プロジェクトの実施に従事しました。中でも、生物多様性の保全プロジェクト一環として、絶滅危惧



マウンテン・ゴリラ (シルバーバック) ルワンダ火山国立公園

種であるマウンテン・ゴリラの生息する火山国立公園支援プロジェクトの立ち上げに関わりました。また、ルワンダの長期国家計画である貧困削減戦略書 (PRSP) が包括する19のセクターのうちの一つ「環境・土地利用管理セクター」のセクター計画作成のための共同議長を UNDP が担当し、私自身が共同議長として1年以上にわたり、議長であるルワンダ政府の環境庁長官を補佐しながら、ドナーの協力を得て計画を推し進めました。

「環境・土地利用管理セクター」計画は、ルワンダの PRSP に反映され、*Economic Development & Poverty Reduction Strategy (EDPRS) (2008-2012)* として、国家計画の指針として採用されました。



国連開発計画 (UNDP) ルワンダ事務所勤務時に参加したワークショップ



バガス発電の視察 (モーリシャスのサトウキビ畑で)

国立大学にて研究・勤務 (2008年～2013年)

ルワンダでの勤務後は、日本に帰国し、東京大学 大学院新領域創成科学研究科 環境学研究系 国際協力学専攻博士課程に進みました。環境協力分野で、いかに国連機関間の「援助協調」を促すかというテーマで、以下のタイトルで博士論文を書きました (*Aid*

Coordination, Competition and Cooperation among UN Organizations for Better Development Results)。博士課程修了後は、2012年4月から東京大学 総括プロジェクト機構「水の知」(サントリー) 総括寄付講座で、特任助教として勤務し、水資源管理に関する研究を進めながら、『水の日本地図』という本を共著で出版したり、「水育」の一環として、都内の小学校で「水」に関する出張授業などを行いました。2013年4月からは、大阪大学 大学院人間科学研究科 グローバル人間学専攻で、特任講師として勤務しました。国際社会開発論という科目を担当し、研究・教育に奔走する一年を過ごしました。

民間財団で国際協力に関わる(2014年～現在)



2014年5月からは、公益財団法人 笹川平和財団 特別基金事業室 室長として、アジア太平洋地域での国際交流・協力事業の実施に携わっています。日本のNGOで仕事をする経験は、2010年に、特定非営利活動法人アゲンスト・マラリア基金(本部:イギリス)というNGOで事務局長として勤務した経験に次ぐものです。現在は、民間財団ならではの柔軟かつ自由な立場で事業開発ができる点に魅力を感じています。

アゲンスト・マラリア基金の活動で
タンザニア・バガモヨ公立病院にて
蚊帳を配布(病院の医師らと撮影)

国際開発とどのように関わって来たか、仕事上の苦勞と喜び

大学卒業後、国際開発・国際協力の実践と研究という道を目指して、一筋に歩んで来たと思います。結果として多くの職場を経験しましたが、継続して国際協力、環境管理という分野に実務者、研究者の両方の立場から携わってきました。世界の様々な国で働くという貴重な機会を得ることで、冒険と驚きと学びの連続でした。常に現場に寄り添った働き方がしたいと思ってきましたが、歳を経るごとに家族の事情も加わり、昨今は、日本に拠点を置いています。実務、研究のいずれの立場にあっても、自分にしかできない貢献とは何か、すなわち「オリジナリティー」を意識して仕事をしています。

私の生き方

人生80年と考えれば、ちょうど折り返し地点をまわり、自身の後半の「生き方」について考えを巡らせています。現在は、民間財団の職員として忙しい毎日を送っています。UNDP ルワンダ事務所で、最初に管理職の仕事に任された時には、私は30代前半で、正直あまり自信はありませんでした。当時は、せめて40代程度の専門性や人生経験を有していれば、より良いマネージャーになれるのではと自問自答していました。そして、今、「不惑」も過ぎた管理職となりましたが、まだ沢山の課題があると感じ

ています。昨今は、自分が「主人公」であるよりも、むしろ職場の同僚や大学の学生、私の小学校一年生になる娘など、私の周りにいる「主人公」たちにいかに生き生きとした職業生活や人生を送ってもらうかにより大きな意識や関心を払っていると思います。自身の生き方としては、何よりも学ぶことに対して謙虚に、誰に対しても誠実に接することを、仕事においても家庭生活においても心がけたいと思っています。